

ICTを活用した教育実施上の 課題解決に向けて

西村礼子先生との対話から

Office Kyo-Shien 代表
池西静江

看護教員のためのオンラインプラットフォーム「NEO」にて企画した池西静江先生、西村礼子先生の対談を受けて、池西先生に感想をご寄稿いただきました。

「看護教育」／NEO編集部

西村先生から受けた刺激

西村礼子先生（東京医療保健大学）は私の苦手とするICTを活用した授業設計の第一人者であると思う。昨年、医学界新聞にて西村先生と対談させていただいたとき¹⁾に、これからの看護師基礎教育をよりよいものにしていくために、さまざまな新たな取り組みを提案されているそのエネルギーに圧倒され、大きな刺激をいただいた。その後、「私には無理」と取り組みもせず諦める癖をあらためて、とにかくやってみて考えるという前向きな姿勢に少しでも変わるように心がけている。そんなことで、最近は、ICTを活用した授業設計にさまざまなトライをしている。アナログ人間の私ではあるが、西村先生の熱いエネルギーから大きな影響を受ける1人である。

今回、再び西村礼子先生との対談の機会を、医学書院のNEOの企画でいただいた。ありがたいことである。今回の対談で得た成果を私1人だけのものにするのはもったいないと思い、みなさんに私の理解した範囲の成果を発信すべく、まとめておくことにする。

教育の基本に戻る4つの要素

2021年度、新型コロナウイルス（以下、コロナ）感染の拡大の影響で冬季に予定していた臨地実習、そして試験（技術試験含む）を、全面学内、しかもリモートで行うことになった。実施にあたっては、ICTへの活用にもさまざまな課題を感じていた。地域により差があるが、私の所属する看護専門学校がある鹿児島県は、それま

では部分的には臨地実習が行えており、特に昨秋からはおおむね従来どおり、全学生が病棟などに行く形で臨地実習ができていた。しかし、今回のオミクロン株の流行ですべての臨地実習が中止となった。期末に近づき総括的評価が必要になるこの時期に一斉登校ができない事態になり、教員は対応を模索している。

そこで、①リモート実習（代替実習）の効果的な方法、②リモートを利用して評価（試験）にどう取り組むかについて、西村先生にお尋ねした。1つひとつ、先生の取り組み例を示して、ていねいに教えていただいた。そのなかで、教育の基本に戻る大切な要素を確認することができた。具体的には以下の4点にまとめられた。

何を教えたいか、目標の絞り込みを行うこと

私は、往々にして目標を欲張りすぎる傾向がある。特に臨地実習においては、せっかく臨地で対象と出会えるのだから、と欲張りな目標を設定していた。あらためてこの機会に、この実習で、あるいはこの講義で何を教えたいか、教えるべきか、と突き詰めてみると、目標を可能な限りスリムにすること、すなわち目標の絞り込みが大切だといえる。

リモート実習（代替実習）ならではの目標を設定すること

以前、私は一度設定した目標は変えてはいけない、と思っていた。確かに教育は、目標達成に向けた、学校という組織のなかでの活動である。勝手に自分の担当する実習や講義の目標を変えることは望ましくない。しかし、コロナ禍はふだんの授業の成立が困難な、いわば緊急事態である。

従来目標を遵守することより、可能な範囲のなかで最善を尽くす、ということが大切であろう。リモートで対象と触れ合うことは現実的に困難であり、対象理解や時間をかけて援助関係を構築すること、援助の結果の反応で、ケア計画を修正し実施することなど、実現が難しいこともあると理解したい。

たとえば効果的なコミュニケーションができる、という目標であれば、場面を切り取ったシミュレーション学習で達成が可能であろう。必要な情報収集ができる、という目標であれば、教材用電子カルテの活用やリモートで患者役とのインタビューなどで、おおむね到達可能であろう。しかし、対象の抱える心身の苦痛を理解するには限界がある。看護ケアも学内に登校できれば、シミュレーション学習で立てた計画を実践することはできるであろうが、自宅からのリモートではそれも困難であろう。

このようにリモート（代替）実習の限界を受け止めて、目標をリモート（代替）で可能なものに修正する必要がある。もちろん、実習目標の修正にあたっては学内での十分な討議が必要なことはいうまでもない。しかし、リモートではできそうにない目標に固執して、教員も学生も苦しむのではなく、できるなかでの最高の到達をめざす、という考え方をしていくべきであろう。

教材研究を行い、可能な最善の方法を考えること

また対談ではリモート実習（代替実習）での具体的なヒントをいただいた。たとえば、看護過程実習では、教育用電子カルテを活用し、学生にとって難易度が高い場合は、情報を削って学生に提示するとよいこと。実践をさせたい場合は退院指導や教育入院の事例を設定するとリモートで指導ができること。手術室での活動などで場を見学させてイメージ化を図りたいときは、YouTubeなどの映像の活用、インタビューや患者指導などは患者（模擬患者・教員でもよい）とのリモート対話が適していること。さまざまな工夫が可能であり、教材開発の努力が必要であろう。

評価でのさまざまな工夫

評価（試験）においても、まずは何を評価するのか（目標）を明確にして、どう評価するのが妥当かを考えること。そのうえで、従来の方法にこだわらず、リモート



トで可能な方法を検討する必要がある。西村先生にその具体的な取り組みと考え方を示していただいた。

LMSなどの仕組み、またGoogleやMicrosoft365などのさまざまなサービスを活用して、試験時間を設定し、そのなかで、解答を送信するように指示する。

そのとき、不正行為を防ぐために、知識を問う客観テストの場合は1問20秒程度のスピードが求められるように問題数を増やし、解答に集中せざるを得ないようにする。思考・判断などを問う場合は記述式で考える設問を課すとよい。いずれにしても時間のゆとりを与えないように、問題作成し、カンニングができない出題形式を考える。諸外国のオープンブックスタイルなどのように、「設問文の状況を理解・解釈したうえで各選択肢の持つ意味を解釈して具体的な問題解決を求める問題」であれば、試験時間をリアルタイム（同時刻）で設定すれば不正は起こりにくいようだ。

技術試験は、テクニカルスキルの習得をめざすものだと仮定すると、教員が評価をするということにこだわらず、チェックリストを作成し、①自己評価、②相互評価を導入するのもよい。どうしても教員評価が必要なものは、期間を設定（1週間程度）し、その間で分散登校し、自分で動画撮影して送信し、教員はそれをみて評価することも可能である。単なるテクニカルスキルだけではなく、対象理解、状況判断を含めた実践能力を評価する場合は、客観的臨床能力試験（OSCE）が有効であろう。これも動画撮影やリフレクションシートなどによる評価が可能である。

グループワークにおける評価についても、①成果物による評価、②自己評価・相互評価の導入、③ブレイクアウトセッションの場面に教員が入り、ワークの状況を観察するといった方法がある。グループ数が多く、教員が入って評価することが難しい場合は、④ワークを学生自身が録画して、それを提出してもらうことで、取り組み姿勢などをみることもできる。いくつかの方法を組み合わせるとリモートでも評価可能であろう。

ICTの教育にはさまざまな工夫が考えられるが、これらはまさに教育の基本に戻るものだと思う。目標を

明確にして、目標達成に向けて、教材や教育方法を工夫して、教育実践を行い、目標到達状況を的確に評価して、次の教育活動につなげる、ということである。コロナ禍で対面授業が難しく、リモートという手段による場合であっても、その本質は変わらないことを再確認した。同時にICTの活用などに取り組んでいくなかで、新たな情報を得る機会やみなさんと意見交換する機会は、これまで以上に大切にしたいと思う。

NEOというサービスにも、大きな期待をしている。私の所属している鹿児島医療技術専門学校も参加した。どんどん活用したいと思っている。

引用・参考文献

- 1) 池西静江, 西村礼子: コロナ禍での看護教員の奮闘に迫る, 週刊医学界新聞(看護号), 第3446号, 2021.

NEOは、「まなぶ・つながる・ひろがる」をテーマとした、看護教員のみなさまのオンラインプラットフォームです。多数のコンテンツをご用意しています。ぜひご参加ください。

NEO Nursing Education Online
<https://www.igaku-shoin.co.jp/b2b/neo>

